
フロンティア

秋元夏空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フロンティア

【Nコード】

N0009B

【作者名】

秋元夏空

【あらすじ】

人の技術が進歩するのは戦争があるからだ。最強の人型兵器FTが戦争での主力になった世界で暮らしている弥勒浩介。日本では本当の戦場なんかにはならないと誰もが思っていた。そんな平和な国で、眠っていたFTが目覚めの時が訪れる。

プロローグ

世間では戦争になる、戦争になると言い続けているけど。実際には本当の戦争にはならない。少なくとも日本とはそういう国だ。内戦とも無縁の平和で穏やかな国で生活する弥勒浩介は平凡に高校生として過ごしていた。

そんな彼は今はすこぶる機嫌が悪い、生徒会選挙で会長に立候補したものの見事に落選を果たし、家へと帰還する途中である。

家へと帰り、テレビを付けるとニュースでは内戦や戦争の事について報道していた。FTという兵器が一般にも広く知られるようになってからどれくらい経つのだろうかと考えた。技術の進歩とは本当に凄いもので、人間は次々と新しい物を生み出していく。

制服から私服へと着替える終えると郵便受けに入っている手紙を取る為に外へと出て、手紙を何枚か取り、家の中へと戻っていく。ほとんどが請求書だったが、一つだけ父親からの手紙があった。手紙には一言だけ書いてあった。

「あゝ、忙しい」 読んでからコンマ一秒でガスコンロの中に直球でぶちこんだ。たまに手紙をよこしたと思ったら実にくだらない事で浩介の不機嫌さに拍車が掛かったのは言うまでも無い。

浩介の両親は仕事の関係で滅多に家に帰ってくる事も無い。軍関係の仕事らしいが浩介も詳しいことは何一つとして知らなかった。

一通りチャンネルを回し、面白そうな番組がやっていなかったため、少し前に話題になった、宇宙人が地球を侵略しに来る「デットバイ・インヴェーダー」というDVDをセットする。典型的なSF映画だが、浩介はこういった手のもの、つまりはUFOとかエイリアンとかに興味があるのだ。無論FTにも興味はある。そんな浩介の愛読本はFTの情報が掲載されている雑誌である。

さて「デットバイ・インヴェーダー」のストーリーは地球侵略を企む宇宙人が偵察目的で主人公の家の近所に引っ越してきて、住み

始める。

それから色々とあり、FTが出現する。全く映画の世界にまでFTを出現させるなど言いたい展開だ。でもって最後には主人公の乗るFTが敵艦、ここはUFOというべきだろう。そのUFOに突っ込んでめでたし、めでたし。

そんなわけの分からない映画なのに人気があるのだから、世も末だなと浩介は思う。思いながらも何度も見てしまうのは何故だろう。インターフォンが鳴り、玄関の前まで行き用件を尋ねる。こういう場合は無闇にドアを開けてはいけない。

「ちわー。お届けものです」

「分かりました」

玄関を開けると、宅配業者の格好をした20代中盤の男が立っていた。男は事務的に荷物を渡し、事務的に判子を求めてくる。判子を取りに戻るのが面倒なので、サインを書こうとペンを借りた。

サインを書き終え、顔を上げると同時に目の前の宅配便の青年は左方向に吹っ飛んだ。5メートル程転がり止った。

「だ、大丈夫ですか!？」

慌てて宅配便の青年に駆け寄るが、返事は無い。浩介は急いで携帯電話を取り出し救急車を呼んだ。

丁度その頃、浩介の家から四件隣で距離にすれば100メートルほど離れている家の庭で一人の少女がライフルを構えていた。

「任務完了」

「アホっ! 何でお前はいつも、いつもそうやって! ああ、あの人死んでないよなあ」

少女の後ろで金髪の青年がしきりにうろたえながら望遠鏡で事の様子を眺めている。

「使ったのは実弾じゃない。死ぬはず無い」

不機嫌そうな口調だった。

浩介は病院に付き添った後に、警察で事情を詳しく聞かれた。その為、家に帰り着いたのは夜の11時を回っていた。

家に入るなりリビングのソファに寝そべる。すぐに睡魔が襲ってきて、ここで寝てしまおうかと思う。そう思っているときに本日二度目のインターフォンが鳴った。

無視を決め込もうとも思ったが、ソファから起き上がり、玄関に向かう。今度は確認もせずに玄関を開ける。

玄関先には金髪で少し長めの髪をした二十代前半の青年と浩介と同一年くらいの長い黒髪をした少女が立っていた。

「夜分遅くにすみません。僕は浅本幸一。こっちは妹の浅本花菜です」

「はあ」

「実は今日この近所に引っ越してきました、ご近所の方にご挨拶をと、これはほんの前住んでいた所のお土産です」

白い紙袋を手渡される。紙袋にはアメリカンセンベーと書かれており、かなり怪しげな食べ物だと浩介は思った。

「ご丁寧ありがとうございます。それでは」

「良い夢を」

玄関を閉め、リビングのテーブルにアメリカンセンベーを放り投げするようにして置き、浩介は寝室へと向かい眠った。

次の日の朝、いつも通りの時間に起きて朝食を食べ、いつも通りの時間に家を出た。通い慣れた通学路を行き、公立”朝陽ヶ丘高等学校”二年二組の教室に入り自分の席の横にバックを置き、よく話をする、岡本一徳といつものようにとりとめのめない話をしていると他のクラスメイトも教室に入ってくる。

チャイムが鳴るとそれぞれが自分の席に着いて、朝の読書の時間に読む本を取り出している。浩介の通うこの高校では朝のHRまでの少しの時間の間に何か本を読む決まりになっている。漫画では駄目で小説を読むしかない。

ちなみに浩介が今読んでいる本は「名も無き宇宙人」と言う題名の本だ。ストーリーはかなりどうしようもないだけ言っておこう。本来なら朝の読書の時間に来る先生は担任ではないはずだが、何

故か担任が教室に入ってきた。担任に続いて入ってくるのは、見覚えの無い少女だった。

クラスメイトが囁きあう中で、浩介は昨日の夜に会った少女の事を眺めていた。そして、納得した。

昨日引越してきて、同じような歳で、家の近所だから同じ学校に通うこともあるわけだな。だったら昨日もう少し話しておけば良かったかな。などと浩介は考えていた。

担任が黒板に名前を書き、少女に自己紹介をするように言う。少女は一步前に出て自己紹介をした。

「浅本花菜です」

軽くお辞儀をすると、担任が座る席を指示する。だが、花菜はその指示に従わずに、担任向かって、いや、クラス全体に向かって爆弾を投下した。

「このクラスに、弥勒浩介と言う少年が居るはずですよ。私の席は彼の後ろか横、最低でも彼の席の前にしてくださいませんか？」

沈黙。担任は花菜を凝視しており、それは他のクラスメイトも同じ事だった。

「それ、デットバイ・インヴェーダー？」

空気を読みたい男ブッチギリ1位の浩介が教室の沈黙を破った。

映画「デットバイ・インヴェーダー」のシーンの中で転入してくる宇宙人が似たような事を言うのがある。

花菜が視線を浩介に向け、何かを言おうとした。だが、それは言葉にはならなかった。突如として鳴り響いた空襲警報に掻き消されてしまう。

全員が窓の外を一斉に見る。外には戦闘機などは飛んでいなかったしFTの姿も確認できない。不思議に思っていると校内放送のスピーカーにノイズが入り、声が聞こえてくる。

「軍から通達がありました。今の警報は間違いだそうです」

学校全体に安堵の空気が流れ、誰もが胸をなでおろしながらこう言いあった。

本当に戦争になることなんかないよな。

窓から視線を戻した岡本一徳は窓に視線を移す前と今の教室は何処か違っていると感じた。間違い探しの要領で教室全体を見回し、その出来事に気づいた。

「ちょっと待て、あの転校生と浩介何処行った!？」

クラスメイトが全員教室内を見渡す。花菜と浩介、二人の姿は教室の中には無かった。

教室内が混乱に陥っている一方で、花菜は浩介の腕を引きながら裏山を懸命に登っていた。舗装されていない道の上に急斜面で息が絶え絶えになっている浩介は、それでもどうにか声を出す。

「い、いったい何処行くんだよ、えっと浅本さん」

返事はない。浩介がもう一度声を出そうとすると、急に花菜が脇道に反れた為に舌を噛みそうになった。

花菜が立ち止まり、青葉はようやく休めるのかと安堵したが、花菜はリモコンらしきもので何かを操作すると、木々が生い茂っている目の前に一機のFTがその姿を現した。

「これは、FT? どうしてここにこんなものがあるんだ!？」

FTとはFRONTIERの略称で近年、先進国を中心に配備が進められている人型兵器の事だ。その戦闘能力は高く、FTに勝てるのはFTだけだと言われている。最近では民族紛争や内戦でも使用されることも多いとニュースでやっていた。

浩介もFTの情報誌などは読んでいたが、実物を見たのはこれが初めてだった。しかも目の前のFTは情報誌に載っていた機体とは完全に別物だと浩介にも分かった。

滑らかな装甲のフォルムに厚そうな装甲、両肩には推進ブースターらしきものが付いており、機動性はかなり高そうだった。武器は腰につけているライフルがメインだろう。

花菜に押し込められるように、浩介はFTのコクピット内に押し込まれる。シートの後ろに移動させられ、花菜がシートに座り、機体に火を入れていく。

ボタンを何箇所か押しレバーを引いたりしていると、目の前のモニターに外の様子が映し出される。目の前と左右両方だ。

「C I 1からH H Fへ空襲警報が発令されたため、行動フェイズC 21に移行させる」

戦争映画で聞くような未知の言葉を当たり前のように花菜は通信で誰かに伝える。

「お、おま、まさか、弥勒をノーチェアスに乗せたりしてないよな？」

「乗せている。これからポイント地点へ向かう」

「あ、アホ！ 絶対にやめろ、それをそこから動かすな。さっきの警報は間違いだ」

「カイト、まさか裏切った？」

「本当だって！」

相手がかなり焦っている事が浩介にも良く分かった。しかし、花菜はそれでも通信の相手の言葉を信じられないように、F Tを発進させるかどうか悩んでいる。

そこに浩介の携帯に電話が掛かってきた。取り出して画面を見ると、岡本と表示されている。浩介は通話ボタンを押して電話に出る。

「浩介か、お前今何処にいるんだよ！？」

「うん、まあ。そのあれだ、この地球上の何処かにいる」

居場所を追求してくる岡本と担任、クラスメイトの質問から何とか逃れ、一つのかかなり疑問に思っている事を聞いてみる事にした。

「さっきの空襲警報って？」

「ああ。間違いらしい」

学校が終わり、浩介は自分の家に帰り着いた。そして今。浩介はリビングでテーブルの椅子に座り、浅本幸一と浅本花菜と向かい合っていた。

「それで、あなたたちは一体何者なんですか？」

「まったく、護衛一日目で正体がばれたじゃ洒落にもならんよなあ」
質問に答える気は無いのかと思ったが、それは思い過ごしで浅本

幸一は自分たちの正体を堂々と明かした。

「はっ？」

「だから、俺とこいつは有体に言えばテロリストだ。だが、普通のテロリストじゃない。俺たちの敵はテロリストだからな」

何かの本で読んだ事があった。テロリストを取り締まる組織、確か名前は。

「カウンターテロリスト？」

「そうだ。それで君を護衛しようとしていた訳は、君がテログループに狙われていると分かったからだ」

聞き捨てならなかった。テロリストに恨みを買う覚えは何も無いし、そもそも一高校生がどうしてテロリストになんか狙われなければいけないのだ。

一つだけ狙われる理由が浮かび上がった気がした。

「君自身が狙われているわけじゃない。ただ君が持っている“デサピア”を奴らは狙っているんだ」

浮かび上がった理由が確信に変わろうとしていた瞬間だった。親父のせいだ。浩介は断言しそうになる。

「FTですね」

「その通り。奴らはこの家の地下にある新型FT“デサピア”と呼ばれる機体を欲しがっている」

想定外の返答が帰ってきた。どうせ親父の造ったFTだろうとは思っていたが、まさかこの家の地下にあるとは信じられなかった。それに新型と言っても浩介がこの家に住み始めたのは今から10年前だ。そんな時の機体が新型と言えるのだろうか。

「10年も前の機体がどうして新型と呼ばれるのですか？」

浅本幸一が驚いたような表情をする。今まで黙っていた花菜が初めて言葉を口を発する。

「君が造ったんでしょ？ 君のお父さんが10年前造りかけのままほったらかしにしていた機体を。最近になって君のお父さんにメールが届いたの。“デサピア”が完成した。とね、その後にテロ組織

が“デサピア”を奪取しようとしていると知って、私達が派遣されてきたの」

「普通の一高校生にFTを造る真似が出来ると思いますか？ 俺は今初めてそんな物騒な物がこの家の地下に眠っていると知ったんですけどね」

これには、花菜も世にも難しい顔になった。

「でも、お父さんは『俺の息子ならFTの一機や二機造るのは朝飯前よがははは』って言ってましたけど？」

普通に考えて不可能だと思う。常識的に考えれば分かることじゃないかと浩介は言いたかったが、やめておいた。この場合は絶対に常識など通用しないのだから。

「とりあえず、正体も知れてしまったことだし。“デサピア”を見せてもらってもいいかな？ どんな機体なのか興味あるし。どうやって地下の格納庫に行くか分かるかい？」

「見当はつきます。この家には10年前から開かずの扉がありますからね」

10年以上も開ける事が出来なかったトイレの脇のクローゼットの中にある思いっきり怪しい扉だ。今までは別に開ける必要も無かったために強引な手は使わなかったが、今日こそは爆破でも何でもして開けるつもりだった。

開かずの扉は奮闘したが、最後はチェンソーでこじ開けられる。その扉の向こうには案の定階段が続いていた。

三人が階段を降り始めて10分程が経過した。いい加減長い階段にうんざりして来た頃に遂に大きな頑丈そうな扉が姿を現した。

開けるかどうか不安だったが、近付くと自動ドアのように開いて行った。扉の中の部屋は真っ暗で何も見えなかった。

突然にライトが光を放ち、一体のFTを映し出した。

全身が黒に染色され、両肩には大型のミサイルポット。背中には大型の翼の形状をしたスラスターが装備されている。頑丈そうな装甲に包まれており、大きさは普通のFTよりも少しばかり大きかつ

た。

腰にはレールガンらしい砲台が設置されているのが確認でき、両腕の脇から大型のライフルと大きな剣が少しだけ姿を見せていた。

「まるで、動く要塞だな」

「これだけの装備を施した機体が、すごい」

一通り機体を眺めていると、突然振動が起こる。

「地震？」

「だと良いんですけどね。カイト！」

「分かっている。くそっ！ ノーチェアスは学校の裏山か」

どうやらこの機体を奪取目的のテログループが本当に襲撃に来たらしい。振動は更に大きくなり、敵側にもFTがいることは明らかだった。

花菜と浅本幸一が自分達の迂闊さを反省し、これからの取る行動を考えていた。浩介は”デサピア”と向き合い、まるで機体に吸い込まれるように歩き出した。

花菜と浅本幸一が止めようとするが、振動で天井の照明が落下し浩介との間を塞ぐ。

浩介は振り返る事もせずに機体に取り込む。コクピットが閉まると勝手に機体に火が入っていく。

「デサピアの名が怖くは無いか？」

機体が語りかけて来た。まるで自分の意志を持っているように。

「意味がわからないな。それより、誰だ？」

「私はこの機体造った者。私はこの機体そのもの」

「やっぱり意味がわからない。戦えるのか」

システムオールグリーン、戦闘モードノーマルで起動。とモニターに書かれた。どうやら行ける様だ。

「あんたの名前教えてくれるか？」

「デサピアだ。君を私のマスターだと認めよう」

浩介が足元のペダルを踏み込むと、背中のスラスタが展開され光の粒子が舞う。デサピアの起動に呼応するように天井のハッチが

開いて行く。デサピアは長き眠りから解き放たれた。

プロローグ（後書き）

戦争とは悲しいものです。彼等は身を持ってそれを教えてくれるはず
です。

PHASE 1…絶望の戦場

地上へと続く最後のハッチを突き破り、デサピアは地上へと到達する。浩介は視認で六機の敵FTを確認する。それに続くようにデサピアも状況を報告する。

「敵FTを確認、データ照合。BR-S96『ゾベーズ』です」

浩介の記憶にある『ゾベーズ』は世界で最も多く配備されている型のFTだ。固定武器は無く、主武装は主にライフルかショットガン。ライフルを装備して狙撃にも使える汎用型だ。

敵は突然の正体不明FTの出現に混乱しているようだった。敵を殲滅するのなら今が好機だとデサピアは言う。しかし、それができない。何故なら浩介はFTを操縦した事は今までに無い。すなわち、何処をどうしていいのかさっぱり分からなかった。

先手を打ったのは、ゾベーズの小隊だった。どうやら、敵だとみなしたようで攻撃を開始する。この状況で突然現れた正体不明FTを味方だと思える能天気なテロ組織などいないということだ。

ろくに回避行動も出来ないまま、敵の砲撃が機体に全弾命中する。普通のFTなら大破するところだが、デサピアには傷一つついていない。だが、機体は無事でも中の浩介は無事ではなかった。攻撃の直撃による衝撃と、機体が倒れた時の衝撃で浩介の意識は飛んでいた。

「装甲に軽度の損傷。戦闘に問題なし。反撃を推奨します」

コクピットの中にデサピアの言葉とアラーム音だけが、響き渡る。同じ言葉を繰り返していたデサピアがやがて言葉を変えた。

「搭乗者の返答無しにより、搭乗者の安全を最優先。システム戦闘モード『DESPAIR』で再起動開始」

都心より離れた住宅街で突然のFTによる襲撃。住民は混乱の中でも必死に生き延びようと逃げようとしていた。そんな様子を見無視して六機のゾベージはデサピアへの再度攻撃をしようと銃口を向け

る。

「よろしいのですか？ あれは我々の奪取目的では？」

「仕方が無かろう。あの機体には既に搭乗者がいるようだ、奪取が無理ならば破壊するしかない。全機ありったけの残弾を奴に打ち込め！ この国の軍が動く前に脱出するぞ！」

六機のゾベージがデサピアの周りを取り囲み、砲撃を打ち込もうとするが、それよりも早くデサピアが動き出した。

大型のスラスターを展開させ、ライフルの砲火をもとめせずに一機のゾベージの頭部を掴み持ち上げ、ゾベージを敵に向かって投げる。ゾベージ同士がぶつかり合い、大破する。

「こいつ、先程とは動きが！？ だが、敵は一機だ。全機取り囲んで奴を撃破しろ！」

デサピアはブースターを展開させ、空中に跳躍する。現代の技術のFTにはそんな真似は到底出来ないはずだが、デサピアは跳躍し、空中から両肩のミサイルポットを開き、ミサイルを発射した。

雨嵐のように降り注ぐミサイルを回避できたのは、ゾベージ小隊の隊長機だけだった。その隊長機もデサピアに頭部を掴まれ、機体を持ち上げられていた。圧倒的な火力の差、機体の性能の差の前に”絶望”した瞬間だった。

デサピアの両脇から上部へと砲台がスライドし、ミサイルポットの横に固定される。持ち上げたゾベージのコクピットに照準を合わせ、両肩に固定したグレネードランチャーを打ち込み、爆発する。

「敵、全機殲滅。新たな機影を六時方向に確認殲滅する」

腰についているレールガンを解放し、両腕でトリガーを支える。両肩のグレネードと両腰のレールガンに続き、残っていたミサイルも一斉に発射させる。

戦闘地帯から二十キロほど離れた場所にいたFTにデサピアの砲火が襲い掛かってくる。真っ白なFTは翼の形状をしたシールドを背後から展開させ、機体を護る。

「αポイントA-23にまで後退する」

デサピアが攻撃の手を止めたのは、単に弾が尽きたからではない。遠く離れたFTよりも近くにいたFTの方が自分にとって危険度が高いと判断したからだった。

浩介の家から脱出し、ゾベージを破壊する気で学校の裏山から出撃した、FT『ノーチェアス』の搭乗者である花菜は惨状を見て背筋が凍っていた。

六機のFTを破壊したにも関わらずに、デサピアには何の損傷も無い。明らかに普通のFTとは次元が違う性能だと分かる。

「未確認FTを確認。データ照合、機密事項A-3の新型機『ノーチェアス』と確認。危険と認識し、排除する」

武装の弾薬がほとんど尽きたために、左脇のグレネードの横に装備されている大型の大剣を引き抜き、スラスターを展開させ一気に間合いを詰める。

「私は敵じゃない」

通信を入れても返事が返ってこない。仕方なくノーチェアスの右腕に装備されているライフルを構え、発射する。胸部に直撃したがデサピアの装甲を貫く事も出来ず、デサピアを怯ますことも出来ない。続いて二発三発と撃ち込むが効果は無かった。

デサピアの攻撃範囲内に入れられる前にブースターを展開し、後退する。デサピアよりも機動性で上回っているノーチェアスは回避に専念した。わずかに残っているデサピアのグレネードやレールガンを全て回避し、通信を入れ続ける。

「今すぐ攻撃を止めなさい！ 一体どれだけの被害が・・・!?」
デサピアの姿がレーダーばかりか、目の前から消えた。辺りを見回してみても姿を確認できない。周りに注意を払いながら、移動しようとした瞬間にノーチェアスの左腕が地面に落ちる。

アラームが鳴り響き、咄嗟に花菜は左側を確認する。そこには真っ黒に染色され、右腕に大きな剣を持ったデサピアの姿があった。何時の間にこれほどまでに接近されたのか、花菜は全く分からなかった。レーダーにも引つかかる事も無くどうやって。

目の前のデサピアが剣を向けてくる。コクピットを貫くつもりのような。徐々に大きくなっていく剣を前にして花菜は目を閉じた。衝撃は襲っては来なかった。恐る恐る目を開けると、モニターの真前で止まっている剣があった。デサピアの頭部の目からは赤い輝きが失われていた。

「活動限界。予定よりも280秒ほど速い。修正の余地あり」

知らない部屋で、知らない天井を浩介は眺めていた。白く清潔感のある部屋は病院の一室を思わせる。ということはここは病院なのだろうか。

備え付けられているテレビのリモコンを操作し、電源をつけると声が聞こえ始め、何かの報道をしているようだった。次に上空からの映像がテレビに映し出された。そこで、浩介の脳裏に昨日の出来事が蘇った。

家の地下にあったあのFTに搭乗して、その後気を失って。気を失った後には何があったのだろうか。

大体の察しはつく、あの後六機のFTによって住宅街が破壊されたのだろう。そしてその六機のFTも花菜の乗るあのFTに破壊され、ここに連れて来られたと浩介は考えていた。

「よお、少年！ 生きてるかね！？」

やたらハイテンションで部屋に入ってきたのは、中年の男だった。浩介はため息を吐きながら、テレビから男へと視線を向ける。

「久しぶり。父さん」

「いやあ、今回の事件はびっくりだったもんだ。お前も大変だったな」

浩介の父親である、弥勒政人はテレビを見ながら呑気そうに言う。

「お前は元の生活に戻りなさい。新しい家はこちらで用意しておく」

「あの機体、デサピアは？」

「ふむう。あれはこちらで預からせてもらう」

預かるも何も、あの機体は元々研究の為に造ったはずではなかったのだろうか。少しの疑問を抱きながらも、それ以上追求することは無かった。

その日のうちに浩介は新しく住む家へと案内された。学校まで徒歩で少しの距離に広がっている住宅街に建っている一軒家だ。

見慣れた街の景色を。見慣れない家の部屋で眺めながら、浩介は事件のあった方角を見つめていた。テレビのニュースではあの事件はテロ支援国家との関係のあるテロリストの無差別テロだと発表されていた。

もう、この街が戦場になるなんてことは絶対ないと浩介は思う。いや、願いであると言ってもいいだろう。あの戦闘で大勢の人が死んでしまった。損害は少なくない。だが、戦闘の原因になったFTはもうここにはない。ここから遥か遠くに離れた山奥の軍の研究所に収まっている。テロリストでも何でも勝手にあの研究所を襲って山奥で戦闘でも何でもやればいいのだ。

浩介が新しい家で街を眺めている一方で、軍の研究所ではデサピアの解析が始まっていた。

「どうだ？」

「駄目ですね。あの機体に使われている全てのパーツが解析不能です」

「明らかに、現代の技術水準を遥かに上回っている機体ということか」

弥勒政人は整備員と一緒にパソコン画面を見つめていた。画面にはデサピアの立体映像とアンノウンの文字が映し出されていた。

「それにしても、妙なんです。あの機体の構造」

「何かあるのか？」

「これです見て下さい」

パソコンを操作し画面が切り替わる。そこに映し出されたのは機体の内部の構造だった。だが、その機体の内部構造をみると誰もが驚愕するだろう。

「あの機体の内部にもう一機のFTが収納されているのか？」

「ええ、それであるFTが通常よりもサイズが大きめなのは分かりますが、こんな機体どうしたって造れませんよ」

「一体誰が造ったというんだ？ この機体は」

政人が見つめる先には、整備員や研究員に解析されている一機のFTがあった。そのFTの名称はUN-00”デサピア”製作者は不明。

倒壊した家。なぎ倒された電信柱。浩介は戦闘があった立ち入り禁止区域に足を踏み入れていた。見慣れているはずの道は、今までに通った事のない初めて通る道に思えた。

浩介は自分が過ごした家を通り過ぎて、ひたすらに歩いていた。何処に行こうとも考えていない。ただ、歩いているだけだった。

破壊された小学校の前を通り過ぎる時に、ふと足を止めた。倒壊した校舎がありその手前には校舎の残骸が散らばっている校庭がある。その校庭の中心に人が立っていた。

花を添えるのでも、死者を弔うのでもなく、ただ立っている人がいた。夜も遅く、満月ではあるものの街灯が破壊され、辺りも暗いというのに小学校の校庭の中心に立っている少女を浩介は見つめていた。

ふいに少女が振り返り、浩介と目が合った。浩介は一瞬ためらったが、そのまま立ち去るのもなんだが気が退けたので、声を掛けた。「何を見てたんですか？」

返答は無い。聞こえなかったのかと思いもう一度言おうと息を吸い込んだ瞬間に、

「死んだ人」

少女が答えた。

浩介はどう答えていいのか分からず、吸い込んだ息を肺に留めていた。やっとの事で声に出来た言葉は無神経なものだと浩介も思う。だが、この場ではそれしか浮かんでこなかった。

「あの事件で、知ってる人が死んだ……の？」

首を横に振る。どうやら知っている人が死んだわけではなさそうだった。だが、やはり先程の答えは何かがおかしいと思う。もしかしたら死んだ人の幽霊がこの辺をさまよっていて、

そんなわけあるかと浩介は思う。浩介はUFOは信じるが、幽霊は信じない主義だ。

「名前は？ 君の」

「・・・シオン」

「しおん？ 詩に音って書くのかな？」

昔近所に住んでいた少女がそんな名前だったから。少女は否定も肯定もしなかった。そこで会話が途切れそうだったので、浩介はすかさず自分の名前を言う。

「おれは弥勒浩介」

少女が何かを言おうとしたが、言わなかった。その代わりに後ろが明るくなり振り返ると、道路に一台の車が止まっていた。車から降りたスーツ姿の男は後部座席のドアを開ける。

浩介の隣を少女が通り過ぎて行き、車に乗り込むとそのまま車は走り去っていく。一人残された真っ暗な校庭で浩介は空を仰いだ。

次の日に学校に登校すると少しの騒ぎが起こった。どうやら、F T襲撃の現場が浩介の家の近くであり、なおかつ連絡も無しに一週間も学校を休んだため、死亡したと思われるいたようだ。とりわけ岡本一徳が幽霊が出たと騒いでいた。

一週間ぶりの学校は何処か新鮮だった。その理由の大半は、クラスに既に溶け込み、様々なアホな発言をしている浅本花菜にあると思うが。

浅本花菜は浩介が休んでいる間も律儀に学校に通い続け、初日に言った爆弾発言とその後の行動についてかなりのでまかせでごまかし、その後は普通に学校生活をしてきたらしい。

二限目が終わり、休み時間が終わり、三限目の英語の教科書を机の上に置こうと取り出すと、何故か英語の教科の先生ではなく、担任の先生が入ってきた。

クラスの生徒全員が不思議がっている中で、担任で世界史担当の石橋明正ちなみに野球部顧問が説明を始める。

「えー、一週間前に転入生が来たばかりだが、実は今日も転入生が来る事になった」

説明終了。生徒のささやき声が聞こえる「まじで？」とか「そんなことあるんだ」とか「普通は他のクラスじゃね？」とか。一番最後の意見に対しては、なんで他のクラスになんだよと反論の声も合った。そう反論したのはクラス一変な事を考える天才、森長陽介である。

そんなささやきあいの中で、教室に入ってきたのは少女だった。森長やその他の男子生徒が一斉に身を乗り出す。女子生徒は少なからずがっかりしているようだった。今度こそはカッコイイ男子が来て欲しかったとでも言いたげそうである。

石橋が転校生の事を説明していた。一徳が浩介の肩を叩きながら何かを言っていた。だが、それらは浩介の耳には届いていなかった。黒板には綺麗な字で「河嶋詩音」と書かれており、石橋の隣には昨日の夜に校庭に立って校舎を、いや、幽霊を見ていた少女が立っていた。

「河嶋、詩音・・・です」

少女の声だけが、浩介にははっきりと届いた。

PHASE 2…家族

授業が終わり休み時間になったにも関わらず、浩介は席に座り、真っ白なノートにシャーペンを構えながら黒板だけを見つめていた。

昨日の夜に出会った少女の転入。別に驚くことでもない、こういうこともあるだろう。だが、浩介は何かにつかかっていた。その何かが分からないから悩んでいるわけでもあるが。

「どうしたい？　ぼけっとしてさあ、もしかして」

「転校生に一目惚れか？」

まったく、どうしてこの二人はそういうことについてしか考えないのかと言いたげな表情を浩介がすると、森長はすかさず浩介の首に手を回しヘッドロックを決める。

「でもさ、結構可愛くねえ？」

「ランクで言うとならランクくらいだな」

森長のヘッドロックから脱出し、浩介は今日新たに出現した席に視線を移す。窓際の列の三番目の浩介の列から右に二列、後ろに三つの所に新しい机が置かれており、河嶋詩音がその席に座っていた。他者との交流を避けるかのように誰とも喋ろうともせず、決して人を近づけない雰囲気があった。

女子も話す機会を窺っている生徒は居ても近寄る者はいなかった。ただ遠巻きに眺めているだけだ。

「普通転校生なら、もっと周りの奴が騒ぐんじゃないか？」

「可愛いからな」

「何か近付きがたい感じだよな。あの転校生」

「可愛いからな」

「誰とも話してないからチャンスだぞ、行け馬鹿二人」

口々にあほな事を言っている岡本と森長の会話に口を挟んだ浩介はまたも森長にヘッドロックを決められ、岡本には団扇で叩かれた。そんな時、クラスの中に小さなざわめきが起こった。浩介はそっ

ちの方向に視線を走らせると、浅本花菜が单身、敵艦に突っ込む所だった。

「私は浅本花菜。実は私も少し前に転校してきたばかりなんだけど、よろしくね」

無言。

「あ、帰国子女だから日本語苦手なのかな？ 英語の方が得意とか？」

そういえばと、浩介は担任の石橋の言っていた事を思い出す。確か、河嶋詩音君は幼い時から外国に住んでいて、つい先日日本に帰国したばかりだとか言っていた。

それなら日本語が得意ではなくいまいちどうしていいのか分からないのかもしれない。そんな風に浩介やクラスメイト全員が捕らえようとしたときに、詩音は鋭く氷のように冷たい瞳で冷たい口調で実に片言ではない日本語を口にした。

「消えろ」

その言葉は光通信よりも早くクラス内に繋がった。一秒前とは詩音を見るクラスメイトの視線が変わっている。

なにあいつ。クラスにいるほとんどの生徒はそう思った。だが、当の言われた本人の花菜は別段気にもしていないようで、というか聞こえなかったとでもいうように話を続ける。

「日本語は話せるんだ。あ、でも英語得意だね？ テストの時・・・」

「うるさい。黙れ」

「ほら！ そのお馬鹿トリオ！！ うるさいから黙りなさい」

ぴしゃりと浩介達を指差して花菜が言う。森長と岡本は何かを反論したが花菜はまともに取り合わず一人で話を続ける。

「日本の文化知ってる？ お茶とかさ、日本人ならコーヒーより・・・」

「黙れ、うるさい。消えろ」

「ちよっとあんた！！ 一体何様のつもり！？ せっかくなかな

が・・・」

かなかなとは花菜の仇名である。その花菜が詩音の態度に腹を立てたクラスメイトを制し、ゆっくりと深呼吸をして、いきなり詩音の手を掴みずかずかと歩き出す。

「暗い！！ 暗すぎる！！ その性格私が直してあげる！！」

「お、おい何処行くんだよ！？」

「浩介君！ 私と詩音さんの早退届出しといてね」

「何で俺が・・・ってもういねえし！」

律儀にも浩介は花菜と詩音の分の早退届を書き、担任に提出した。早退理由を一身上の都合によりと書いたために担任から睨まれたが別に気にしない事にした。

そんな慌しい一日も無事に過ぎて、浩介は新しい家への帰路に着いていた。遠くに見える住宅街は凄まじい惨状で、あの事件を鮮明に蘇らせてくる。浩介は瞳を背け歩き始める。

新しい家の玄関の前に立ったときに、初めて鍵が掛かっていない事に気がついた浩介は不安になった。朝鍵をかけ忘れたのか、それとも泥棒にでも入られたのだろうか。

ゆっくりと玄関のドアを開け、家の中を覗き込むと、

黒い煙が充満していた。

多分それは、火事などで出るあの黒い煙の事だと分かるまで実に一二十秒の時間を浩介は所要した。

浩介は玄関から一步引いたところに立ち、家の中からもくもくと出ている煙を眺めていると家の中から二人の人影が這い出してくる。

「ごほっ！ ごほっ！！ 失敗したかなあ？」

「・・・だから、あれほど危険だと言った」

「なにやってんだよ！？ あんた達は！」

おもわず大声を上げてしまう。その大声に家の中から這い出してきた二人は浩介の方に振り返る。二人共顔が黒くなっていた。

「おおう。浩介君学校終わった？」

「俺の家で一体なにをしてるんだよ！？」

「うやあ、お昼ご飯を作ろうかと思ったんだけど・・・少し失敗しちゃって」

「これをか！？　これをあんたは少しで済ませるのか！？　大体、何で俺の家で・・・」

高らかに叫びながら、煙がもくもくと出ている家の中を指差す。その時に初めて気がついた。浩介の指差す方向には玄関があり、その横にはおびただしい数のダンボールが積まれており、そのすぐ横には旅行の時に使うダッフルバックが置かれていた。

嫌な予感を感じた。だが、そんな事があるはずないと懸命に打ち消しながら、花菜に不満を叫ぶ。叫んでいる時にもやはりあのおびただしい数の荷物に視線が行ってしまい、その視線に花菜が気づいた。「あ、あれ？　浩介君にはまだ言っていなかったけ？　私達今日からこの家で暮らすんだよ」

「帰ってまえ。てか帰れ！！　ん？　まてよ？　今、私達って言ったか？」

「そう。詩音も今日からここで暮らすの」

「なんでやねん！？　なんでやねん！　なんでやねーん！！！」

煙が収まり、浩介は家のキッチンで二人分の遅いお昼ご飯を作り、リビングで待っている二人の前のテーブルに料理を置いてから、自分もキッチンの椅子に座る。座りながら浩介は恐らく今まで生きてきた人生の中で最大のため息を吐いた。

いきなり河嶋さんを連れ出して何をやっているかと思えば、なにをどうしてこの家で暮らす事になるんだよ。などと考えながら浩介は父親に連絡を取る手段を考えていた。一刻も早く新しい家を用意してもらわねば死んでしまいそうだからだ。

花菜の説明によれば、花菜と浩介の父親が昔からの知り合いで（学校ではそういう設定になっている）今回、花菜の父親が海外転勤になり、日本を離れ海外で暮らす事に抵抗があると言う花菜の意見を汲んで、旧知の親友の弥勒宅に置かせてもらう事になった。まあ、ここまでは浩介も別に良いと考える。花菜がカウンターテロの第一

人者であろうと何であろうと、きっとそっちの事情があるだろうと思うからだ。しかし、問題はこの先だ。そして今日。何故か詩音に家を聞き出し、保護者を小一時間ばかり説教を食らわしてやろうと思った花菜が、詩音の家に殴りこむとそこには誰もいなかった。詩音の話では両親が海外から日本の本社に転勤になり、一足先に日本に帰国したが、その転勤に話が無くなってしまい、花菜は日本で一人暮らしの生活になったと言う。どれほど無責任な親なのだかと浩介は思う。自分もそんな無責任街道まっしぐらな父親を持っているから余計そう思ってしまう。

そんな家庭の事情を知った花菜が自分も引っ越したからと言って、部屋にある荷物をまとめさせこの家に拉致よろしく連れ込んだと言うのだ。というか転校から一週間後に引っ越して普通はおかしいと思わないのかなと浩介は思う。

「おおお!？」 浩介君なかなかやるわね! 結構おいしいじゃない?」

「さあな? 自分で作ったの食ってもおいしいとかいまいち分からなくて。まあ、あんたよりかはおいしいだろうけどな」

「むっ。浩介君ねえ、さっきからあんた、あんた、あんたって連呼してるけど私にはアマミヤ・・・じゃなくて浅本花菜っていう名前があるんだからね!」

どうせ偽名に決まっているだろう。その証拠に違う名前を言いかけた。全く危なっかしい。そこで浩介は疑問に思った。花菜は背格好も見た目も自分と同じ歳に見えるが、本当は何歳なのだろうか。いや、それ以前にどうしてあんな危険極まりない仕事をしているのだろうか、傭兵なんて。

自分が疑問に思うことじゃないと浩介は考えるのを止めた。そして、うるさい花菜とは正反对で静かに料理を食べている詩音に会話を放る。

「どう? 味は?」

「・・・さあ?」

会話終了。会話のキャッチボールがうまくなされない。浩介は静かに肩を落とした。

それから、日が落ちるまで各自の部屋割りを決め、曜日ごとに家事の分担を決めた。月曜日は浩介がお風呂掃除で、花菜が洗濯と掃除。詩音がご飯と言った具合だ。浩介は明日から近くのコンビニのお世話になることを覚悟していた。詩音はともかく花菜にまともな料理が作れるはずがない。

とりあえず、今日の夕食担当の詩音をキッチンにまで連れて行き、何処に何があるのかを教えた。そしてリビングに戻ろうと思いキッチンを出かけて、詩音の方を振り向くと、何故か包丁を兵士が戦場でナイフを逆手に持つようにして持っていた。

前言撤回。今日からコンビニのお世話になることは間違いなし。

それから一時間後。浩介は近くのコンビニで弁当を三つ買っていた。どうやら、浩介の予想通りにこれからはほぼこのコンビニのお世話になるようだ。

夕食を食べ終え、お風呂にそれぞれ入り。リビングで三人揃ってソファに座っていると、詩音が一番早く舟を漕ぎ出した。時差ぼけの影響か、それとも元々夜は早く寝るほうなのか、時間はまだ九時だ。

「眠いの？ 眠いんだったら、もう部屋に戻った方が・・・」

「甘い！！ 甘いわ浩介君！！ 夜はまだまだこれからよ。こんな時間に寝るなんて、人生の八割は損しているわ！！」

「そりゃ、凄い割合だな」

眠そうに目を擦っている詩音に視線を向けた花菜は、まるで小さい子供に向けるように優しい表情になる。

「そうね、今日はいろいろあったから疲れたのね。もう眠ったほうがいいわ」

「・・・うん」

ゆっくりと立ち上がり、リビングを出て行こうとする詩音の背中に花菜が声を掛ける。

「詩音。夜はおやすみなさいよ」

「・・・うん。おやすみなさい」

昼間の様子とは打って変わって、無防備にそして素直に花菜の言う事を聞いていた。その事に浩介は驚いていた。

「きつと、根は優しい子なのね。今日は長い間外国にいたのに一人ぼっちで日本に迷い込んで、心細くてどうしていいのか分からなかったのよ。だから、あんな事を言っちゃたんだと思う」

そう言ってソファに座った花菜はどこか嬉しそうに含み笑いをする。

「でも、なんかこういうの家族って気がしない？ 手が掛かるけど素直な子供もいるし。温かな家庭ってこんな感じなのかな？ って何言ってるんだらうね？」

「なあ？ 一つ聞いていいか？」

「なに？」

「どうして、浅本さんはこの家で暮らす事になったんだ？ 浅本さんが転校してきたのは、俺の護衛をするためでしょ？ でも、俺が狙われていた理由の機体はもう研究所にあるからその必要はないんじゃないか？」

「私って、昔から学校とか行ったことなくて、どうしても行って見たい時があって。そんな時に護衛と言う理由からだけど、日本の学校に行ける事になって。不謹慎だけど嬉しかった。でも、その仕事もすぐ終わっちゃって、落ち込んでいた時に浩介君のお父さんが、どうせだからもう少しだけ通ってもらおうかって言ってくれて。それで、まだあの学校に通ってるんだ」

少しだけ、本当に少しだけだけど、浩介には花菜の事が分かった気がした。謎も多いし、変な行動ばっかだけど、せめて少しの間だけでも文句も言わずに付き合ってあげようと思う。

「でもさ、浅本さんがいなくてあの研究所大丈夫なのか？ 浅本さんパイロットでしょう？ そんな時に襲われたら」

「大丈夫大丈夫。あの研究所にはいっぱいパイロットもいるし機体

もあるし警備は万全。カイトもいるしね」

「幸一さん？」

「そう。本名はカイト・ヘルズニルク。ドイツ人と日本人のクォータとか。私達の部隊の隊長さん」

——本名はカイト・ヘルズニルク。ドイツ人と日本人のクォータとか。私達の部隊の隊長さん。

自分の部屋のベットの中で毛布を被り丸くなっている詩音の耳のイヤホンから浩介と花菜の話している声が聞こえてくる。浩介の服に仕込んでおいた盗聴器からの流れてくる声だ。

詩音はベットから起き出し、机の上に置いていた自分のノートパソコンを起動させる。パスワードを入力し、完全に起動させ、両手をキーボードに走らせる。暗闇に光るパソコンの光に映し出された詩音の顔は眠そうな印象など受けもしない。ただ、冷徹で氷のように冷たい印象しか残っていない。

PHASE 3：何の為に？ 前編

ぼんやりとコンビニの棚に陳列されている弁当を眺めている浩介の姿があった。近くにコンビニがあつて本当に良かったと浩介は思う。もしそうでなければ食べ物を求めて近所の家に侵入を計っていたかもしれない。

まだ、朝陽もろくに昇っていないような時間。正確には朝の五時半に浩介はコンビニで弁当を眺めていた。といっても、朝早いため弁当らしい弁当はほぼ無い。仕方が無いのでサンドイッチとコーヒーをそれぞれ三人分買ってコンビニを後にする。

ビニール袋を自転車のかごに入れ、サドルにまたがりペダルを漕ぎ出す。春先で桜の季節とはいえ、朝の風は肌寒かった。

家に帰るとまず、リビングで待っていた詩音と花菜に朝食を渡し、浩介は凄まじい惨状になっているキッチンへと向かった。

ガスコンロはあちこち焦げていて、フライパンも同様に焦げている。一体、何をどうすればこんな風になるのかを浩介は教えてほしいくらいだった。

やはり一刻も早く、新しい家を用意してもらうべきだと浩介は本気で考える。二日目の朝からこんな調子では一週間ほどで恐らく死んでしまうだろう。

「さて、今日はこの後どうしようか？」

朝食を食べ終わった花菜がさも当然のように言い放つ。予めいつておくが今日は休日ではない。平日だ。その事を分かっている浩介は取り合いもしない。

「別にどうもしない。これから学校だ。ほら早く準備しろ」

「真面目少年だなあ。普通はこれから学校サボって遊びに行こうぜい！　とか言わないかなあ？」

「何を基準にすればそれが普通になるのかは知らないが、今日は学校だ」

リビングを出て行こうとする浩介の背中に花菜の「ケチ。ドケチ。まじめんば」と言う呟きが突き刺さってくる。更に花菜は詩音に抱きつきながら、浩介を指差す。

「実はねえ、浩介君ったら昨日の晩に私を無理矢理押し・・・」

「んなことするかぁ!! 何を吹き込もうとしてるんだよ!? 何を!?!」

全く、昨日は学校に行く事が嬉しいとか夢みたいとか言っていたくせになんで今日になっていきなり不良少女よろしく学校サボるとか言い出すんだか、浩介は半ば呆れかけていたがビデオデッキに半分ほど刺さっているビデオを目撃する。

どうやらレンタルビデオのようだが、あんなものを借りた覚えは無かった。大体題名からして「逃げる学生サボり逃走劇」って意味が分からなかった。恐らくは花菜にあの研究所の誰かが持たせたものだろう。

なるほど、あれの影響を受けいかに学校をサボることの素晴らしさを学んだわけか。

花菜はうるさかったが、浩介はほとんど無視して学校に向かう。詩音と花菜は浩介の後ろを歩いていて二人で何かを話していたが浩介にはほとんど聞こえなかった。

浩介と花菜が教室に入り、クラスメイトが声を掛けてくる。だが、花菜の後ろにいる詩音の姿を見たときに声のトーンが低くなり、黙ってしまう。他のクラスメイトも話すのをやめ、教室に重たい空気が流れ始める。

教室の雰囲気には浩介はふと花菜はこうなることを分かっていたのではないかと思い始める。だからこそ今日はサボるとか言い出したのかもしれない。確かに昨日あれだけの発言をしてしまえば、誰でも奇異の目で見えるだろう。だが、だからといっていつまでも逃げるわけには行かない。これからこの学校に通い続けるのだから。

「ほらほらぁ! どうしたのみんなぁ? 朝からくっらいなく。あ、今日ね詩音が皆に言いたいことあるんだって」

クラスメイトの視線が一斉に詩音に集まり、その中には森長と一徳も含まれている。花菜に背中を押されながら詩音が前に出て行く。そして、

「あの・・・ごめんなさい」

謝った。クラスメイト。特に女子が意外そうに「えっ？」とだけ声を上げる。

「んー、詩音もねえー、昨日の事は本心じゃなかったんだよお。ただ、長いこと外国にいたからどうしていいのか分からなかったんだよねえ？」

ゆつくりと頷く。詩音が素直に謝った事もあるが、花菜の説明と人柄がクラスメイト達を納得させた。

ああ、そう言う事だったのか。確かにそうかもなと誰かが小声で言った。先程まで張り詰めていた重たい空気は何処かへと吹き飛び、教室にはいつも通りの空気が流れ始める。

これが、花菜の描いていたシナリオ通りなのかもしれないと浩介はただそう思った。

学校の授業が終わり、家へと帰ると意外な人間が訪問してきた。研究所直属の特殊部隊隊長のカイト・ヘルズニルク。カイトは訪問してきてリビングの椅子に座ると詩音に視線を向け、席を外してほしいと言ってきた。何故ここにいいのかの理由を問うつもりはないらしい。

花菜が詩音を連れて二階へと昇っていくと、唐突にカイトが切り出す。

「君はあの機体をどうやって起動させたんだ？」

「いきなり・・・なんですか？」

「どうやって起動させたと聞いているんだ」

質問の意味がさっぱり理解できなかった。どうやらあのFT”デサピア”の起動の事で何か問題があるみたいだが、正直な話、あれの起動のさせ方など浩介にも分からない。あの時は機体に取り込むと勝手に起動していったのだから。

その事をカイトに話すと、少しの間何かを考えるような素振りを
見せる。

「そうか。実はあの機体がどうしても起動出来なくてな・・・悪い
が来てくれないか？ あの研究所に」

「俺が行ってどうなるんです？」

「君にもう一度だけあの機体に乗ってもらう」

断るべきだと浩介は言う。そう、断るべきだったのだ。しかし、
浩介は何故か断ると言う事をせずにカイトの車に乗り込んでいた。
窓の外の景色が市街地から森へと変わっていく。

「詩音、一人だけ置いて来て良かったのかな」

「小さい子供じゃないんだから大丈夫だよ」

後部座席に乗っている花菜が心配そうな声を出す。その言葉には
「どうして私も、行かなきゃいけないの」という響きも混じってい
る。

研究所に着くとすぐに格納庫へと案内される。格納庫には浩介の
父親の政人を始め、大勢の技術者達が揃っていた。

カイトが政人に浩介の到着を告げると、技術者達が一斉に浩介を
見る。これじゃさっきの詩音みたいだなと頭の片隅で思いながら、
政人に言われるままに”デサピア”のコクピットに入る。ハッチが
閉まるとやはり、前回と同じように勝手に起動していった。

「久しぶりですね。マスター」

「聞きたい事がある。どうしてこの機体を起動する事が出来ないん
だ？」

「この機体の管理は全て、私が行っています。従ってマスター以外
の人間が搭乗しても起動をさせることは出来ません。私が起動させ
ませんから」

「どうして？」

「必要がないからです。それはそうと、前回の戦闘データの分析が
ありますご覧になりますか？」

浩介は顔を顰める。あの破壊された住宅街を見るなどもう二度と

御免だと思いながら、デサピアの申し出を断った。

「他には前回での起動時間の問題は既に改善されていますので・・・」

「起動時間？」

「そうです。前は初めての起動でしたので起動時間に問題が発生し、本来よりも早く機能が停止しました。その為、敵一機を破壊する事が・・・」

「敵一機を破壊・・・？ 前回の起動時間・・・？ おい、前回の戦闘データってのを見せてみる」

スクリーンに見覚えのある光景が映し出される。地下から地上へと飛び立ち、ゾベーズを肉眼で視認したところだ。ここまでは浩介も覚えている。そして敵の攻撃を受け、気を失った。

浩介は、気を失った後の映像を見る。機体が動き出し、敵を掴んで持ち上げ投げた。ミサイルを発射し住宅街もろとも敵を殲滅した。気が狂いそうになる。あの住宅街を破壊し、大勢の死傷者を出した張本人が自分だったと浩介は分かってしまった。最後の一機の頭部を掴み、持ち上げる。そして次の瞬間には零距离からのグレネードランチャーを受けたゾベーズの残骸が地面に落ちていくのを見た。ゾベーズの残骸が学校の校舎を破壊していく。あの学校の校舎だった。

「もう・・・止める。どうしてだ？ 俺が、俺がやったのか？」

「いいえ。マスターの意識が無くなったのを確認し、生命を保護を優先とし私が敵を排除しました」

「お前は何なんだ？ 兵器なのか？ 何故兵器が自分の意志を持っている？」

「そのように造られたからです」

「誰にだ？」

「私にです」

話にならない。機械が自分で自分自身を造った、そしてその機械は意志を持っている。これはもはや兵器や機械とは違う異質なもの

ではないか。浩介は乗っている機体に恐怖を覚えはじめた時、施設内に振動が起きた。

地震とは違うような、何かが。それに次いで、施設内の警報が鳴らされ、浩介はメインスクリーンに外の様子を映すように言った。格納庫のでは、慌しく走り回る整備員や研究者の姿があった。花菜とカイト、他のパイロットと思える人間はパイロットスーツを着る事も無く、機体へと乗り込んでいく。

何があったか浩介は理解できた。この施設は敵襲を受けていると恐らく敵の目的は”デサピア”だろう。どうして、こんな辺鄙な研究所の正体が漏れたのだろう。完全な軍事機密のはずだ。

「外部からの通信。遮断しますか？」

「繋げ」

「浩介、聞こえるか？ 現在この施設は敵の攻撃を受けているが。だが心配するな、この施設には腕の立つ傭兵達がいる、そこら辺の国の軍隊にも負けないようなパイロット達だ。お前はそこでばーとしていればいい。分かったな」

浩介はゆっくりと操縦桿を握る。政人の言った言葉の意味が分からなかった訳ではない。むしろその逆である。政人がその機体を降りろとは言わなかったのは、万が一の場合の時に一番安全なのはこの機体の中だと思ったからであろう。そして、その万が一が起きるような規模なのであろう敵は。

全ての通信周波数をオープンにし外にいる人の話し声も聞こえるようにし、浩介は目を閉じ、様々な声を聞いていた。

戦闘の状況。戦闘をしている者達の声。誰かが救援を求めている。敵か味方かどちらかが撃墜された。一人、また一人と人が死んでいく。

「デット・バイ・インヴェーダー」でも宇宙人の攻撃で大勢の人が死んでいく中で、民間人の主人公はただ、死なないように逃げることししか出来なかった。その主人公は自分の無力さを憎み、軍へと志願し入隊しFTの操縦の訓練を受け、短期間で操縦をマスターし、

同胞を殺した宇宙人を倒すために出撃する。そして最後は敵を倒すために自分も死ぬ。そんな主人公を浩介はカッコいいと思っていた。自分の命を落としてまで、誰かの為に戦って死ぬ。人間は大昔からそうやって敵と戦ってきた。この場合は外で戦っている傭兵達は自分の為に戦って死んでいるのだろうか。それとも仕事だから、金の為に戦って死ぬのだろうか。敵は誰の為に何の為に”デサピア”を手に入れたいのだろうか。

「これの動かし方を、戦い方を教えてくれないか？」

「了解しました」

”デサピア”の声にただ耳を傾ける。他のすべての音声を遮断し、ゆっくりと操縦桿を握る両手に力を入れ、”デサピア”に言われた通りに動かす。

足のペダルを踏み込み、スラスターとブースターを起動させる。

「格納庫のハッチを開けて下さい。この機体で出ます」

花菜は敵のゾベーズ一機を破壊した後に、レーダーで戦場の状態を把握しようとする。味方も何機か破壊されているし、敵の規模も大きい。完全に劣勢だと自覚する。

警報が鳴り、敵が背後から接近していると教えてくる。右腰に装備されておる、剣を引き抜き振り向きざまに敵のコックピットを貫き、敵の剣をかわす。

更に左右両方からゾベーズ二機が接近してくる。花菜は軽く舌打ちをし、両手に装備されているライフルのトリガーを引くが、弾は発射されること無く乾いた音が響いただけだった。

「弾切れか」

両腕のライフルを敵に投げつけ、更にライフルとは少し離れた位置目掛けて剣を投げる。飛んで来たライフルを回避したゾベーズの正面には剣が飛んで行き、コックピットの突き刺さる。

残りの一機は、左腰の剣を引き抜くとブースターを展開し、敵の

攻撃を回避し正面へと到達しコックピットを貫く。

息つくを暇も無く警報が鳴り響く。後ろを振り返るとそこには何も無い。メインスクリーンには上を指す矢印が表示されていた。

ノーチェアスがまるで空を仰ぐように上を見ると、そこには空中で静止した一機のFTの姿があった。白一色で染色された機体は、機体構造も装備されている武器も今までに見た事が無い機体だった。技術者ではない花菜も一目見ただけで、今の技術を遥かに越えている機体だと分かる。

ふとそこで”デサピア”の事が脳裏をよぎった。が、それも一瞬の事で、向けられた銃口をただ見つめていた。

ライフルはない。武器は剣一本のみ。おまけに敵は空中を飛んでいる。

「ここまでか・・・」

覚悟を決める。元々こんなものに乗っている傭兵なんて仕事をしているのだ、いつ死ぬかも分からない。だが、出来る事ならまだ生きていたかったと思う。もう少しあの子と・・・。

正体不明機の銃から何かが発射される。それは銃弾ではなく青い光だった。その青い光は目標に着弾し爆風を起こした。ノーチェアスが激しく振動する。花菜はメインスクリーンに頭をぶつけた痛さでまだ自分が生きていると実感する。

急いでスクリーンを見ると、目の前に黒一色で染色された機体の姿があった。

「デサピア」

PHASE 4…フロンティア

白一色で染色された正体不明機とノーチェアスの間に入ってきたのは、黒一色で染色された”デサピア”だった。前回見た時とは違い、左腕にシールドを右腕にライフルを装備していた。

デサピアが背中の大型スラスターとブースターを起動させ、空中で静止していた機体の目の前まで一瞬で到達する。シールドを持っている手の甲から、ブレードが出現し敵を切り裂こうとする。

正体不明機はデサピアの攻撃を難なく回避し、蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたデサピアは降下し、地面へと叩きつけられる。正体不明機はデサピアに銃口を向けるが、発射するよりも早くデサピアがグレネードとミサイルを一斉に発射する。虚を突かれた正体不明機の回避は間に合わない。だが、背中の翼のような形状をしたものが機体を庇う。

「あの機体に乗っているのは？」

二機の戦闘の様子をただ見ていることしか出来ない花菜はデサピアの搭乗者が誰だか気になっていた。

「こちら、カイト。レーダーにアンノウンが二機映っているが、分かる者いるか？」

「敵側の新型FTともう一機は”デサピア”よ、今私の目の前で二機が戦っている。誰か援護に来れる者は？」

「こちらはマライだが、敵の挙動がおかしいぞ。まるで何処かに集結しようとしているみたいだ」

花菜の乗るノーチェアスのレーダーに信じられない数の敵反応が表示される。どうやら集結している場所はこのようだ。

「集結場所は、アルファ3」

急に正体不明機が攻撃の手を止める。その理由は周辺に味方機が集結したからであろう、正体不明機は高みの見物でもするつもりなのだろうか。

中破したノーチェアスとデサピアを囲んでいるゾベーズはゆうに二十機は越えている。普通なら逃げ出す状況だろうが、デサピアは敵の攻撃を自機に集中させようと突っ込んでいく。

間合いを詰めながらミサイルとグレネードでゾベーズを破壊していき、一機のゾベーズの頭部を掴むと敵に目掛けてぶん投げる。

ゾベーズの攻撃などものもしない頑丈さで装甲を貫く事も敵わない。ゾベーズが残り十機になり、集結する陣形を取った。

そこで、初めてデサピアは右腕のライフルを集結したゾベーズに向け、トリガーを引いた。ライフルからは青い光が放たれ、一直線に進んでいく。直進の間に周囲の木々を薙ぎ倒し、目標へと着弾すると大きな青い爆風が起きる。

ようやく、花菜の味方の機体が到着した時にはゾベーズは全滅した後だった。カイトも含め、全員がデサピアの圧倒的な性能に驚愕する。それが一番大きかったのは、一部始終を見ていた花菜だった。「仲間も全滅しただろう。もう充分だ、撤退しろ!!」

オープン周波数で浩介の声が聞こえてくる。正体不明機は素直に撤退する気はないようで、再度銃口をデサピアに向ける。

「あのアンノウンの性能は未知数だ。全機”デサピア”の援護に回れ」

正体不明機のライフルから、デサピアと同じ青い光が発射され、味方機は散開しデサピアの後方で援護射撃を行う。

デサピアもブースターを展開させ、移動しながら敵をロックオンし持っている火器を全て一斉に発射する。正体不明機は大半は回避したが回避できないものはシールドで防ぐ。

正体不明機がデサピアに集中していると背後から緊急ブースターと倒れた巨木を使ってジャンプした一機のノーチェアスが剣を上段から振り下ろす。

「もらった!」

「ちっ! カイト・ヘルズニルク!」

「今の声!？」

「何処かで・・・」

振り返ると同時に正体不明機は剣を左腕で掴み、真っ二つにへし折る。デサピアの時と同じように地面へと蹴り飛ばし、銃口を向ける。

レーダーの背後に反応があり、警報が鳴る。デサピアが先程と同じように目の前まで迫ってきていた。今度は回避する事が出来なく左腕がブレードで落とされる。

「なるほど、お前も。”フロンティア”」

機体の搭乗者はそれだけを言い残し、撤退した。その速さは現在存在するどんな兵器よりも速いだろう。

戦闘が終わり、その後の処理に慌しく人が動いている間に、浩介は格納庫のデサピアの前で座っていた。その横に花菜も座る。

「ありがとう。助けてくれて」

「聞かないのか？ 父さん達みたいに」

「私にとって命の恩人。それだけよ」

訓練も無しにFTを動かした浩介は技術者やこの研究所の関連の人間から興味深い目で見られていた。唯一”デサピア”を動かせる人間として見ている者もいるだろう。その証拠として、これからはこの研究所で協力を余儀なくされた。もちろんデサピアのデータを取るためのテストパイロットとして。そして、敵が言い残した”フロンティア”とは何を指すものだったのかを明らかにするため。

今までどおり普通に学校に通いながら、そんな事に手を貸すなんて出来の悪い三流映画の主人公かと浩介は思っている。

「よっ。お二人さん」

「カイト」

「元気ないなあ、もっと明るく行こうぜい」

「浩介君は慣れてないだけよ」

慣れたくなんか無かった。人を殺す事に慣れたくなんか無い。結果として今日は人を一人も殺してはいなかったが、この先どうなるか分かったものではない。

「にしても、あの敵は何なのかね？　あの新型もそうだが、あれだけの数のゾベーズを遠隔操作できるなんて遥かに今の技術水準を超えているぞ。何処の国の物だ？」

「ソ連かアメリカしかないんじゃない？」

「あ、そういや、お前らあの敵のパイロットの声になんか聞き覚えがあるみたいだったよな？」

「う、うん。ただ、知り合いに似ているなあって・・・あ、でも絶対ありえないからね？　あの子にそんなこと出来るなんて絶対ありえないから！」

そう、確かに花菜の言うようにありえない。だが、あの時のあの声は確かに聞き覚えのある声だった。氷のように冷たく機械のように冷徹なあの声。以前聞いた事がある。それは河嶋詩音の声だった。

PHASE 4..フロンティア（後書き）

サブタイトルですが、ミスではないのでご了承ください。

PHASE 5..秘密の仲間

あの日以来、浩介の日常は表向きには何も変わっていない。普通に学校に行って、普通に一徳や森長と馬鹿な会話をして、普通に授業を受けて学校が終わる。学校が終わってからはあの研究所へと赴き、FTの知識や操縦技術。そして万が一の時の戦闘術を教わる日々が続いている。

そんな生活が続けば身体的にも精神的にも疲労が溜まるのは当たり前だ。政人は学校には行かなくてもいいと言ったが、それは浩介が認めなかった。学校が生き抜きの場といえかなり変わっていると思われるだろうが今の浩介は学校でクラスメイトと一緒にいることが一番の息抜きになっている。

最近はある家に帰る事も少なくなり、詩音や花菜ともあまり喋っていない。クラスは一緒でも話す事は滅多に無かった。

「前回の起動時の駆動系の問題点においては既に解決いたしました」デサピアに乗り込み起動し終えるとこの機体の支配者”デサピア”がメインスクリーンに問題点についてのレクチャーを表示する。それに目を通しながら浩介はこの機体がいかに異質な存在かを再認識する。

まず、この機体はまだ未完成なのだ。出撃するたびに”デサピア”は問題点を指摘してくる。前回はFT同士の模擬戦の時に駆動系に問題があるといってきた、その問題は既に解決したといっている。すなわちデサピアは自分で自分を改良している。

そんな馬鹿な話はないと技術者達は口をそろえて言っていた。しかし、それは事実なのだからしょうがない、デサピアはまだ未完成で自分自身を完成させようとデータを収集し、それを造っているのだ。

とすると自分の存在価値は何なのだろうと浩介は思う。もしかしたらデサピアのパーツの一つにしか過ぎないのではないかとも思え

る。用がなくなったら捨てるパーツのような。

「分かった。今日はもう用はない。ハッチを開けてくれ」

コクピット内が真っ暗になるとハッチが開く。外の格納庫で待っていたのは傭兵部隊の一人。ジャック・アイドンだった。

「少年。ずいぶん死んだような顔をしているな」

「まあ。正直死にそうなの日々ですけどね」

「そうだろうさうだろう」

ガシッと横から浩介の首に手を回してきたのはジャックの仲間であるマカフィー・マヴォルトで浩介は嫌な予感を覚えた。今までの経験上この二人に囲まれて良い事があった試しが全く無い。

「なあ浩介。日本人とはいいいものよのお」

「・・・突然何を言い出すのですか？」

「ここのスタッフは日本人が多いからのお」

「あの？ 二人共喋り方変ですよ？ まあ、元から日本語自体間違ってるから別にいいけど」

ジャックとマカフィーはよこしまな目付きで日本人女性スタッフを眺めている。そして凄い勢いで浩介に向き直ると二人共真剣な表情で同時に、

「今から女風呂を覗きに行こうぜよ」

まことに馬鹿な事をいいだすのだった。

「嫌ですよ。大体今日は・・・」

反対する浩介にジャックは真剣に言う、

「なあ、浩介。俺たちみたいな兵士はいつ何処で死ぬかも分からない。だからな、だからこそ！ 俺たちは女風呂を覗いてもいいという権利があるのだ！！ お前も兵士なら一緒に風呂を覗くんだ！！」

真剣な表情なのに言っている事が凄まじくアホだ。きっと一徳や森長だったら喜んでついて行くことだろうが、残念ながら浩介にはばれた後の事が恐ろしいのでやっぱり賛成は出来ない。ジャックとマカフィーが何と言おうと賛成できない。何故なら今日は、

結局その場を偶然通りかかったカイトも巻き込まれ、四人で神風特別攻撃隊。俗に言う特攻隊よろしく女風呂へと向かい特攻をするのであった。

ジャックとマカフィーの作戦ではまず女風呂のある施設の反対側へと周り、こっそりと窓を開けて直接覗く。この際窓が開けられた事がバレないかだが、大浴場で湯気も立っているためバレる可能性は極めて少ない。

確かに男として女風呂を覗きたいと思うのはしょうがないことかもしれない。実際浩介にだって本当は見たい気持ちはある。だからと言って、だからと言ってその為には命さえ投げ出していると思っただことは一度も無い。何故自分たちは今断崖絶壁の崖を命綱無しで渡っているのだろうか。

その理由はまず、施設の反対側が海で道など無いから。そして女風呂を覗くには断崖絶壁を慎重に歩き、目標地点の下に到達と同時に上へと上昇。目標を確認しなければいけない。通りで今まで何人もの猛者が女風呂を覗こうとして断念してきたのか浩介には身に染みて分かる。

まさに難攻不落の要塞であるはたまたはベルリンの壁とでも呼べばいいのだろうか。

「まさか・・・こんな事をするとはな」

「つてかカイトさんはどうしてついてきたんですか？」

「そりゃ、なあ？ 見たいだろ？」

浩介はため息をつく。それこそ人生の中で二番目に大きいくらいのため息を。もう少し真面目な人かと思っていたが、傭兵なんかやっている人は皆揃ってこんな風にアホなのだろうか。

目標地点の真下に到達した。ジャックとマカフィーの作戦通りに登山用の装備を使い登り始める。一番最初に窓に手が届きそうになったのはジャックで、意気揚々と窓に手をかけると。

窓を少しだけずらす。その少しの隙間から女風呂の中を覗き込む。

「おおお」

四人同時に声を出す。その時カイトは世にも恐ろしい見てはいけないものを見てしまったような表情をする。浩介とジャックが不思議に思っているとその答えはすぐに解けた。マカフィーまでもが似たような表情になっている。

そしてジャックもその姿を目に留めたときに似たような表情になってしまった。同じ表情三人衆が同じタイミングで声を出す。

「か、カノン!？」

「誰?」

「や、やばいぞあいつがいるとは」

「というか、あいつは浩介の家にいるんじゃないのか!？」

「まずい。ジャック、マカフィー撤退だ。撤退しろ」

マカフィーの言葉からどうやら三人が怖れているのは花菜だと言う事が分かる。先程から何度も言おうとしたのに、そのたびに邪魔されて言えなくなっていたのだ。何故今日は花菜がこの基地にいるのかと言えば、花菜の乗るノーチェアスに試作型の装備をつけたのでそのテストをして欲しいと政人が言ってきて、浩介と同じくこの基地にやってきた。

「うん?」

「どうかしたの?」

「うやあ、どうして窓が開いてるのかなあ?」

疑問に思い窓の外を身を乗り出して眺める花菜の視界にははるか遠くまで広がる海と、断崖絶壁しか映らない。花菜は誰かが開けて閉め忘れたとしか考えなかった。つい十秒前まではこの窓から馬鹿四人が覗いていたとは夢にも思わなかった。

施設のラウンジでカイトがコーヒーを飲んでいる。ジャックとマカフィーは夕食を摂っており、浩介もまたカレーを食べている。

「私もカレーにしようつと」

カイトとジャック、マカフィーがその声に一斉に振り向く。そこには風呂から上がったばかりの花菜が立っており、三人が一斉に見たため不思議そうな表情になっている。

「ジャックたち。何かあったの？」

「世の中にね、知っていい事と知らなくてもいい事があるんだよね」
「？」

PHASE 6：使い魔

浩介達がアホな特攻を敢行してから少しの時が過ぎた。季節も春から梅雨へと移りそして、夏ももうすぐ始まるうとしていた。

期末テストも終わり、学校の生徒達はあと夏休みまでどれくらいの日数があると数えている。浩介もまた夏休みを心待ちにしている一高校生の一人である。もっとも去年までの夏休みとは違い、遊びの予定が何一つ事前に入られない現状でもあるが。

休み時間の度に一徳や森長に一夏の淡い経験をしに行こうぜと誘われるのを断り続けている。二人はしつこくその理由を問い質してくるが、まさか本当の理由を言うわけにはいかないので適当にあしらっている。後ろの方の席で携帯電話の着信音が聞こえてくる。

春先から数回の席替えで、浩介は窓側の後ろから三番目の席に、その隣に花菜、前に一徳。後ろは詩音の席になってる。だが、詩音の携帯が鳴る訳ない。そもそも、詩音は携帯を持っていないと浩介は思う。だからいつも詩音の席に集まる誰かだろう。

その予想は大きく裏切られ鳴り続ける携帯を片手に詩音が教室から出て行く。浩介が意外そうに詩音が出て行った教室のドアを眺めていると、自分の携帯も鳴りだした。その後に花菜の携帯。

そして極めつけは第三次敵襲警報が木霊した。

花菜は教員用の駐車場に止めてあった車を拝借して、市街地を爆走する。他の車両の姿は認められず。地域住民は指定のシェルターへと避難しているのだろう。がらがらの市街地を爆走する車の上を輸送機が通り過ぎていく。

花菜はアクセルを踏み込む右足に一層力を込め、浩介は一層大きな悲鳴を上げ続けた。海の近くの広場に輸送機が降り立つ。それに続いて車が一台ものすごい勢いで輸送機の元へと突っ込んできて、手前で止まる。中からは花菜と死にそうな顔をした浩介が出てきた。周りにはかなりの数の輸送機やミサイルポット、アメリカ製の自

走砲。そしてFTまで待機している。まるでこれから戦争でも始まるのかと浩介は息を呑む。

花菜と浩介はカイトから今回の緊急作戦の概要を伝えられた。

「今から三時間ほど前、日本の領海内で海上日本軍第十二艦隊が何者かと交戦し壊滅した」

「艦隊が!?! 信じられない」

「戦争が始まるんですか?」

「いや、何処の国も軍隊を出動させていない。これは偵察衛星などで証明もされている」

まさか、あの時のあの白い機体ではないか。いかにあの機体が現代の技術水準を上回った高性能機といったところで一機で艦隊を潰せるのだろうか。花菜にはあの時以来何処の国の戦場にも姿を現していない白い機体の事が気になっていた。

「そして、艦隊が壊滅した所はここ。つまりこの浜辺から一直線と言うことだ」

「でも、敵も一直線にここを目指すなんて、そんな安直な考えでいいの?」

「既に太平洋側の海に通じる全ての場所に戦力を配置している」

「敵の正体についてはいまだに何も掴めていないんですか?」

この質問にカイトは返答に困る。

「いや・・・艦隊の司令官が最後に残した言葉があるそうだ」

『敵は艦隊でもFTでもない。気をつけろ、奴らは・・・』そこで通信が途切れている。つまり撃破されたということか。

それにしても、司令官の言い残した言葉はより一層疑問を深めるものだった。敵は艦隊でもFTでもない。そして”奴ら”と呼んだことからやはり敵は複数いる。

現時点の情報はこれぐらいしかない。ブリーフィングが終わり、花菜はパイロットスーツを着る為に輸送機の中に、浩介は制服のまま機体に取り込む。

今までに訓練の時も機体に乗るからにはパイロットスーツくらい

着ろと言われていたが、浩介はいつも制服で乗り込んでいる。自分は軍人でも傭兵でもない。ましてや人殺しでも。

そう思いたいからパイロットスーツを着る事が出来ないでいた。

「おい、機体で待機してからもう一時間になるぜ。もう他のどこに來てんじゃないか？」

「いや、まだ何処からも連絡が入っていない。持ち場を離れるなよ」
「じゃあ、もうどっか別の所に行ったか」

ジャックの言う事もっともだった。艦隊が壊滅した位置と日本本土の距離は決してそう遠くない。来ようと思えば既に到達しているはずだ。それなのにまだ何処にも來ていないとなると。

”デサピア”のセンサーに何かが反応した。

「海中に熱源を探知。來ます」

「各機へ。どうやら敵が來るようです」

全員が海に注目する。確かに海が何かで波を立てられていた。そしてその正体を初めて全員が視認する。

「あれは・・・まさか」

「嘘だろ？　こんな」

「でかい。なんなんだよこいつ」

「タコ一匹に艦隊が全滅したと言うのか」

海からの侵略者。それは常軌を遙かに逸した大きさのタコであった。その大きさはFTよりも巨大で起き上がると東京タワーにも匹敵しそうに思える。

「バンデット1より各機へ。敵が姿を現した。日本の陸軍の前で醜態は晒すなよ」

「逆に足を引っ張れないか心配だな」

「バンデット2了解しました」

あんな巨大なものが陸に上がったとなると大惨事は免れない。絶対に波打ち際で仕留めるしかない。短期決戦が予想され、陸軍のミサイルポットと自走砲の援護の元FTが浜辺で射撃を行う。

ノーチェアスにもライフルの他にロケットランチャーとグレネー

ド、ガトリング砲の予備装備が各機の周辺の輸送車に積まれていて、出し惜しみ無く使っていく。

それでも、巨大生物であるタコは一向に進路を変えようとしなない。弾は直撃しているはずなのだが、やはりあれくらい大きなものになると生命力も半端ではないらしい。防衛線は後退を余儀なくさせられ敵が浜辺に上陸する。浜辺に上げられるとその大きさを改めて認識する事が出来る。

浜辺に上がったのを好機と見た陸軍のFT”れいしき零式”が剣を片手に真正面から頭を狙おうとすると、タコが何かを吐いた。

それは零式の装甲に付着し、みるみる内に溶かしてしまふ。身動きが出来なくなった零式はタコの足でばらばらに碎かれる。

「あのタコ、墨の代わりに硫酸を吐くようね」

「あ——！！　んなのタコでも何でもねえだろうが。あれじゃまるで生体兵器だ」

「待て、硫酸ではFTの装甲を溶かすことは出来ん。あのタコの吐いているものはマグマに似たようなものかもしれんぞ」

既に人知を超えている。そんなタコがこの地球上に存在したとは誰も予知できたものはいないであろう。その脅威が今日の前にいるのだ。勝者は規格外生物か人類の化学の結晶か。

陸に上がった事で攻撃の全てが直撃する。にも関わらずタコは倒れない。ミサイルやグレネードがいくら当たろうともいまだに倒れない。その生命力には舌を巻くしかない。

唯一幸いなのはタコの動きは鈍く、接近さえしなければ被害はないと言うことだ。だが、いつまでもそう樂觀視して入られない。この浜辺にいる内に仕留めなければ街が壊滅してしまう。

「俺が零距离から攻撃を行います。その援護を！」

「おい、待て！！」

カイトの静止を聞かず、浩介の乗るデサピアは浜辺に降りタコに向かって一直線にブースターを展開させ接近する。

「援護は任せろ！」

「足を狙え！」

「バンデット1から各機へデサピアを援護しろ。なるべく敵の足を狙うんだ」

ジャック機ノーチエアスとマカフィー機ノーチエアスが右、カイトと花菜のノーチエアスが左の足に照準を合わせ攻撃する。

日本陸軍もそれぞれ足に攻撃を集中させ、味方の援護を受けてデサピアがタコの墨もとい酸を回避して懐へともぐりこみ、一斉に全武装を解放し零距离射撃を試みる。

凄まじい爆音が起こりそれに次いで爆風が巻き上がる。タコの巨体は零距离からの攻撃で飛ばされ海の中へと落下する。

爆風が収まり、デサピアが悠然と浜辺に立っている光景を見て、ジャックとマカフィーは歓喜の声を上げる。花菜とカイトもほっと安心し、陸軍の兵士も歓喜する。周囲に勝利の喜びが広まろうとした時デサピアが背を向けた海から巨大なタコが出現し、迎撃しようとしたデサピアの機体に足で絡みつく。上空に装備していたレーザーライフルが飛ばされる。

『敵は艦隊でもFTでもない。気をつけろ、奴らは……』

「奴らは一匹だけではない！ 十二艦隊の司令官はそう言いたかったのか！」

「ちっ！ デサピアが邪魔で攻撃が出来ん」

「くそっ！！ どうすればいいんだよ！？」

「見殺しなんて……出来ない！！」

花菜の乗るノーチエアスが浜辺へと下り、剣を構える。ジャックが何かを叫ぶ。ジャックだけではない。カイトもマカフィーも何かを叫んでいるが花菜には聞こえない。そして前へと一步を踏み出そうとしたとき。

「来るな！」

浩介の声が聞こえた。

「来るな。この機体の装甲なら貫かれはしない。だから大丈夫だすぐに脱出する」

とは言ってみたものの、はっきり言ってかなりまずい状況だった。レーザーライフルは飛ばされ、背中のグレネードはがちりと固定されていてスライドできないしミサイルポットのハッチも開かない。「敵巨大生物によって現在機体の全火器が使用出来ません」

デサピア自体もこう言っているし、浩介は何処か諦めにも似たため息を吐く。操縦桿を引いても腕一本動かない。完全に力で負けている。

「出力に難があります。改善の余地あり」

「あのなあ、この場を無事にどう切り抜けるか少しは考えてくれよ。お前は意志を持っているんだろ？」

「考えるのは搭乗者である浩介です」

本当に人間みたいに意志を持っている奴だと思える。デサピアが浩介の事をマスターではなく、浩介と呼ぶようになったのは浩介自身がそう言ったからだ。デサピアは言った事を忠実に守る。それは機体のバランスに関してもそうだ。

「左腕のブレードで足を切るのはどうだ」

「シュミレーター開始。結果は脱出できる可能性はフィフティ・フィフティです」

「試す価値ありか」

よしっと気合一発さあやるぞと思った時に、メインスクリーンに警告が表示される。レーザーにも反応し警報もうるさい。浩介はスクリーンの矢印によって機体を上を向かせ確認すると、そこには青い空があり白い雲があった。その中の小さい白い雲は少しずつ大きくなってき、それは雲ではないものを形成していく。

それは一機のFTの姿。遙か上空から白い翼を持ち降下してくるその姿はまるで天使のようだった。

白いFTはレーザーライフルの照準を足にピンポイントで合わせ、デサピアを拘束する足を貫く。デサピアの拘束が緩くなると同時に地上に着地しデサピアを蹴り飛ばし間合いを取らせ、両腰に差していた刀のような形状をした武器を引き抜くと、敵を切り刻む。

「援護してやる」

以前とは違いまるで機械を通したかのような声質だった。

「お前はあの時の。一体何が目的だ？」

「援護してやると言ったんだ。それにお前たちに無駄口を叩いている暇があるのか？」

反論する暇も無く浜辺には多くのタコが侵入してくる。どうやら今までののは先遣隊で本隊が到着したようだ。

「我々は援護を感謝する。だが・・・」

「我々陸軍としても援護を感謝する。存分に戦ってくれ」

「言われるまでもない」

「その機体は？」

「ふん。どさくさに紛れて情報でも聞き出そうと言うのか？ まあいいだろう名くらいは教えてやる。”アガシオン”だ」

アガシオンは左腕にデサピアのレーザーライフルを持っており、それを地面に放り投げる。拾ってはやった後は自分で拾え。とも言いたげだ。アガシオンの介入によって陸軍はその性能を初めて見せつけられる。自分達の攻撃が通用しなかった巨大生物を一撃で倒していく火力。戦場を自由自在に駆ける機動力。そして搭乗者の熟練した技術。どれをとっても敵としてあったのならこれほどの脅威はない。

陸軍と傭兵部隊がタコ一匹に手こずっているのに比べ、アガシオンはタコを次々と殺していく。信じられない高性能の機体を前にしているが、自分たちがそれに匹敵するほどの機体を既に持っているのには気づいていない。デサピアもアガシオンと同じ性能があるはずなのだ。だが、両機の圧倒的な違いは搭乗者の力量の差である。

「この前より悪くないな。なら行くぞ」

全てのタコを排除し終えたアガシオンが選択した行動はデサピアに攻撃を仕掛けることだった。アガシオンの刀による攻撃を剣で受け止め弾き返し、ライフルを発射する。

「あなたの目的は一体何なんですか！？」

「私に見せてみる本物の”フロンティア”の力を」

「バンデット1より各機へ、デサピアを援護しろ！」

デサピアの援護に入ったノーチェアスと零式は一瞬の内に行動不能に陥る。アガシオンはあえて止めを刺さずにデサピアと一騎打ちをするための準備をした。

「くそっ！」

「その程度か？」

全ての攻撃が回避され逆にアガシオンの攻撃は全てデサピアに直撃する。圧倒的な力量の差の中で浩介は初めて戦場で死ぬかもしれないと思った。今までも死ぬかもしれないとは思っていた。だが、それはあくまでもかもしれないで、本当に死ぬなんてことはあるはずがないと思っていたのかもしれない。

「機体損傷度が増大しています。システム停止。システムをDESPAIRで再起動します」

「待て、何だそれは？」

デサピアの瞳の色が青へと変わる。その変化に気づかないアガシオンはコクピットを貫こうと突きを繰り出す。

アガシオンの刀を左腕で掴んだデサピアがその刀を握り潰す。後退するアガシオンに全ての武装を解放するデサピア。その射撃は先程よりも遥かに正確になっている。回避することで精一杯のアガシオンが回避できない攻撃を翼で庇い、翼を広げた時には目の前にはデサピアがいなかった。

警報が鳴り響き、右に旋回するとデサピアとブレードの光が見えた。回避しようとしたが左腕を切り落とされたアガシオンは間合いをかなり空ける。

「やはり、本物か」

アガシオンは背を向け、戦場から急速に離脱する。デサピアは追おうとはせずにただその姿を眺めているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0009b/>

フロンティア

2010年10月14日17時08分発行